

健康通信

きずあとこの治療について



形成外科医師
大 雄也

形成外科は皮膚の外傷や腫瘍、顔の骨折、組織の再建、先天奇形の修正など、主に体表面の疾患を取り扱う診療科です。このことから形成外科は、体内の臓器を扱う診療科と比較すると、患者様の Quality of Life (生活の質) の問題に向き合う機会が多い診療科と言えます。

その中で問題となる事が多いのはやはり「きずあと」です。皮膚の表面にとどまる擦り傷や浅い火傷であれば傷跡を残さずに治る事も



ありますが、ある深さ以上の外傷、手術創などは、傷跡を残さずに治す事はできません。そこで私達形成外科医は、これからできる傷跡、成熟してくる最中の傷跡、完全に落ち着いた状態の傷跡に対し、どうすればより目立たなくなるかを考えて日々の診療を行っています。

これからできる傷跡について

手術により意図的に傷をつける際にもちろんのこと、外傷によりできてしまった傷に対しても最終的にどのような傷跡になるのが良いかを予想しながら

治療を行っています。火傷や切り傷、擦り傷など日常の些細な事でも最終的に傷跡を残す外傷は起こりえます。これらの傷に対して丁寧に処置するのは当然大切ですが、誤解される事が多いのは、より丁寧に綺麗に縫合すれば傷は綺麗に治るのではないか、という事です。傷が治っていく過程では、傷にかかる緊張、感染、血腫の存在、低栄養状態、浮腫(むくみ)など様々な要因が傷の治りを遅くし、傷跡を汚くする因子として働きます。これらの増悪因子を抑えるため、場合によっては丁寧な縫合を、場合によっては縫わずに軟膏を、場合によっては陰圧閉鎖療法など特殊な機械を使用する事で、最終的な傷跡がより目立ちにくくなるよう工夫をしています。



成熟してくる最中の傷跡について

ここで問題になるのは、いわゆる「ケロイド」です。従来は、傷の範囲を超えて増生してくるケロイドと、傷の範囲内にとどまりながら肥厚していく肥厚性瘢痕の二つを区別して考えられてきましたが、最近では両者は炎症の強度

や持続時間の差であり、同様の疾患概念であると考えられるようになってきました。ケロイドに対しては、手術に放射線療法などを組み合わせる事で改善が見込める場合もありますが、まずは外用剤、圧迫療法などで保存的に治療を考えます。

完全に落ち着いた傷跡について

傷跡の炎症が治まり成熟した傷跡となったところで問題となるのは、主に外見と拘縮(つっぱり)であり、治療としては手術が中心になってきます。傷跡を完全に消す事は不可能であるため、傷跡を目立ちにくいように変形、移動させる方法など様々な術式が考案されています。患者様が何に不都合を感じているかをよく聴取し、少しでも悩みを軽減する方法を提案できれば、と考えています。

傷跡でお悩みの方は形成外科にご相談ください。解決する方法が見つかるかもしれません。



問合先 市民病院 (☎76・4131)